

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 23 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653048

研究課題名（和文） ライフヒストリーデータの質的分析と量的分析の統合

研究課題名（英文） Integration of qualitative analysis and quantitative analysis of life history data

研究代表者

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：30261564

研究成果の概要（和文）：本研究では、ライフヒストリーに関する調査法と分析法に関して、新たな方法の可能性を検討した。第一に、収集に関しては、カレンダー形式で CASI による調査を実施し、ライフヒストリーのデータの有効な収集法の可能性を見いだした。第二に、データの量的な分析法と質的な分析法について検討した。新たな量的な分析法を検討するとともに、質的分析についてもテキスト分析などの可能性を探った。インターネットによるライフヒストリー調査は、量的、質的データを得、分析する上で、簡便で有効な方法であることを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：We examined the possibility of new methods about the collecting and analyzing a life history. First, about collection of life history data, we collected the data by CASI (Computer Assisted self-Interview) using life history calendar form. From this survey, we find the possibility of the effective method of collecting the data of a life history. Second, we examined the quantitative analysis method of life history data and the qualitative analysis method. While we examine new quantitative analysis methods, we explore the possibilities of text analysis about qualitative analysis. The life history survey using internet is a method simple and effective survey when collecting quantitative and qualitative data.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	300,000	0	300,000
2010年度	2,100,000	0	2,100,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	150,000	3,050,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ライフヒストリー、質的調査、量的調査、系列分析

1. 研究開始当初の背景

I. 研究の背景

(1) これまで最も代表的なライフヒストリー研究は、Elderの『大恐慌の子どもたち』であり、歴史的・社会的変化と子どもの

ライフコースの関係を明らかにするものであった。

(2) しかしその後、欧米では大規模な量的調査がおこなわれるようになってきた。例えば、PSID、マックスプランク研究所、

GLOBALIFEなどさまざまなプロジェクトがあり、それらは長期にわたるパネル調査である。

- (3) 日本においても、家計経済研究所の「消費生活に関するパネル調査」をはじめ、慶應義塾大学の家計パネル調査、東京大学社会科学研究所の「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」など、パネル調査が盛んにおこなわれるようになってきた。それにともない、ライフストーリー研究も活発におこなわれるようになってきた。
- (4) こうしたパネル調査や回顧的な調査票調査によるライフストーリーデータは量的データであり、これらのデータ分析の方法は、従来の移動表分析など単純なものから、イベントヒストリー分析などの因果分析の方法、さらには、最適マッチング分析等のライフストーリーの分類や特徴の析出を目的とする分析手法など、様々な分析手法が開発されている。
- (5) 一方、ライフストーリー（ライフストーリー）の聞き取り調査、モノグラフ、あるいは伝記、自伝的分析も、これまで社会学や人類学において数多くの研究蓄積がある。これらの調査では、主観的なライフストーリーの語りや評価が焦点となっている。またデータは、質的データであり、統一した分析法があるわけではない。
- (6) ただ、質的データ分析法は、ライフストーリー研究とは別に、テキストマイニングやコンピュータ支援による分析が発展してきた。
- (7) 以上のように、ライフストーリーの調査、データ、分析手法に関する研究は、活発に行われているが、客観的なライフストーリーのデータ収集と主観的なライフストーリーのデータ収集は、基盤となる方法論が異なるため、これまで接点がなかった。そのため両データを同時に収集することはなく、また同時に分析されることもなかった。それゆえ、主観的に語られるライフストーリーが客観的なライフイベントとどのような関連にあるのかは、十分に明らかとなっておらず、ライフストーリー研究において重要な研究課題となっている。

II. 研究動向

ライフコースに関する量的研究は、調査法、分析法ともに発展している。パネル調査の方法論、回顧型の調査の方法論（例えばLife History Calendar 形式）、分析方法の革新が進んでいる。一方、質的研究も、生活史研究などの枠組のなかで、計量的手法を否定的にとらえ、解釈学的アプローチをとりながら多様な研究がおこなわれてきた。分析法について

は、量的分析においてはイベントヒストリー分析が発展し、広く利用され、また最適マッチング分析、Transitional Data Analysis など多様な分析法が開発されている。質的分析については、従来の解釈学的方法に加えて、佐藤郁哉が提唱しているようなコンピュータ支援型の質的分析法や、グラウンデッド・セオリーアプローチなどが近年注目されている。

2. 研究の目的

(1) 調査法の開発

主観的に語られるライフストーリーと、客観的なデータ収集を目指すライフストーリーに関する情報とを、同時に効果的かつ効率的に収集する調査方法を開発し、両者の関連を明らかにし、ライフストーリーが個人の中でどのように構築されているのかを、計量的な手法により明らかにする。

(2) 分析法の開発

語りや日記などの質的なデータ分析（例えばテキストマイニング）と客観的なライフストーリーデータの量的なデータ分析（イベントヒストリー分析や最適マッチング分析）とを組み合わせた統合的な分析をおこなうことで、ライフストーリーの形成要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 既存研究のレビュー

ライフストーリー研究は、トマス＝ズナニエツキのポーランド農民研究以来、膨大な研究がある。現在のライフストーリー研究につながる重要な研究としては、Elderの『大恐慌の子どもたち』や、McAdamの『フリーダムサマー』などがある。これらの研究ではデータ数は多くないものの、量的な分析を試みており、方法論的にもあらためて検討する必要がある。また近年のライフストーリー研究については、Mortimer and Shanahan (eds.), *Handbook of the Life Course* やJAI Press から出版されているAdvances in life course research シリーズが詳しいので、それらの研究を参照しつつ、最新のライフコース、ライフストーリー研究、新しい調査技法、分析手法をフォローした。さらにプロジェクトとして、ミシガン大学のPSIDやマックスプランク研究所の調査、GLOBALIFEプロジェクトなどの最新調査の成果についても、検討を加える。

(2) 既存データの二次分析

第一に、既存の量的データの再分析をおこなう。具体的にはライフストーリーやキャリアに関するデータは、SSM データ、JGSS データ、旧日本労働研究機構がおこなった職業経歴に関する調査、全国家族調査などにおいて、かなりの程度得ることができる。これら

の精度の高い調査データを再分析することで、ライフヒストリーに関するデータ分析の課題と可能性について検討する。

第二に、既存の質的データの分析をおこなう。具体的には、公開されている自伝や日記の分析をおこなう。テキストマイニングの手法を使い、何をどこまで明らかにできるのかを確認する。

(3) 調査の実施と分析

インターネットを利用したカレンダー形式の調査を実施する。加えて、自由回答を多数盛り込むことによって、回答者自身のライフストーリーを聞き出す。

分析については、第1に単純集計やクロス集計などの基礎的な分析をおこなう。第2に最適マッチング分析や決定木分析によってライフイベントの系列の特徴や規定因を明らかにする。

(4) 新たな調査法と分析法の開発

既存データ、新たにおこなった調査のデータの分析を通じて、新たな調査法と分析法の可能性を探る。

4. 研究成果

(1) ライフヒストリーを自記式による調査によって収集する方法の開発をおこなった。具体的には30代、40代の既婚女性を対象にし、カレンダー形式の調査票を利用することで、職歴、家族歴、居住歴を関連づけながら、回答者が回答できるような調査を、webを利用しておこなった。いわゆる CASI (Computer Assisted Self-Interview) によるライフヒストリー調査の可能性を探った。

CASI によるカレンダー形式の調査では、回答者は質問に回答していくごとに、西暦、年齢が自動的に書き込まれた表に回答内容が書き込まれていくようになっている。こうすることによって、職歴、家族歴、教育歴など複数の経歴を同時に一つの表によって、回答者は確認することができる。さらに、人生を評価する質問や、転機など人生を振り返ってもらう質問においても、カレンダーが参照できるようにすることで、記憶が喚起されるような仕様になっている。

この調査から、カレンダー形式の調査票と CASI によって複雑な調査内容を、ある程度容易に収集する方法を確立することができた。特に以下のような成果を得ることができた。①複雑な回答内容をカレンダー形式で表現していくことで、回答を容易にした、②矛盾する回答内容を排除し、論理的に一貫したデータ収集を可能とした、③人生に関するさまざまな意識や考えについて、自由回答で尋ね、テキストでファイルに直接書き込むことで、回答者は容易に自由回答をすることがで

きた、④CASI によって、回答者の回答が直接データ作成となることで、データ入力のコスト、誤りの可能性を排除することができた。

web を利用した調査にもとづくこのようなデータ収集法は、個別面接調査にも応用可能であり、今後縦断調査、パネル調査に展開、利用していく方法を検討していく必要がある。

一方、調査の課題も明らかとなった。主な課題は以下の通りである。①カレンダー形式を利用したことで、回答がある程度容易になったが、十分に容易とはなっておらず、時間がかかる、②記憶を連動して想起させるような認知科学的な質問の仕組みができていない、③覚えていない、記憶が曖昧といった回答内容の正確さに関する情報を収集することができない。

以上のような課題を今後検討していく必要がある。

(2) 新たな分析手法の可能性として、SSM データや関西学院大学社会学部卒業生調査を利用し、決定木分析によるライフヒストリーデータの分析をおこなった。決定木分析をおこなうことで、ライフヒストリー上の分岐点を探る方法として、有効であることを確認することができた。具体的には、貧困に陥る誘因や既婚女性のライフコースパターンの規定因を探った。

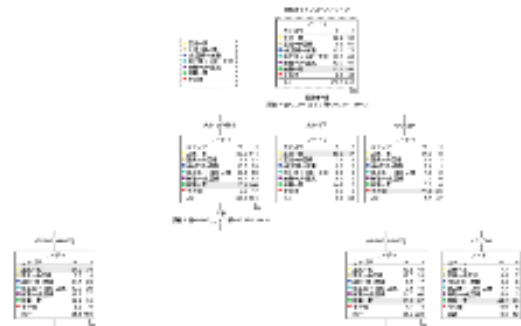


図 1. 決定木分析 (部分)

その他にも、ライフヒストリーの図示方法についても、いくつかの方法を試した。

分析法の検討から、ライフヒストリーデータの複雑さを、いかにして縮減していくかが重要であり、その縮減の仕方は分析目的と強く関連していることを、確認した。そのため、標準的なデータ分析の方法を確立することは難しく、データ、研究目的に応じた分析法を探索していく必要がある。

(3) 質的データと量的データの結合については、インターネット調査の自由回答の分析をおこなった。自由回答については、独自にテキスト分析をおこなった。例えば、母親の人生についての評価については、肯定的な意見と否定的な意見が混在しており、両義的であることがわかった。そうした母親に対する態度が実際のライフヒストリーとどのような関係にあるのかについては、まだ十分に分析できておらず、今後検討していく必要がある。

また人生における転機に関しても実際のライフヒストリーデータとの関連を検討してみたが、顕著な関連は見いだせていない。

しかし、ライフヒストリーデータに関して、インターネット調査は、論理的にデータを収集できるという点において量的データの収集に適しており、またテキストデータの収集において優れている点から質的データの収集にも適していることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 渡邊勉、大卒者のライフコース—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(4)一、関西学院大学社会学部紀要、111: 99-120 頁、2011 年、査読無.
- ② 渡邊勉、職歴からみる雇用の流動化と固定化、現代の階層社会 2 階層と移動の構造、173-188 頁、2011 年、査読無.
- ③ 渡邊勉、貧困と職業キャリア、現代日本の階層状況の解明—ミクローマクロ連結からのアプローチ 第 1 分冊 社会階層・社会移動、223-242 頁、2011 年、査読無.
- ④ 渡邊勉、大卒者の入職過程と職業キャリア—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(1)一、関西学院大学社会学部紀要、110: 1-22 頁、2010 年、査読無.

[学会発表] (計1件)

- ① 渡邊勉、大卒者の就職とキャリア—関西学院大学社会学部卒業生調査の分析(1)一、第 83 回日本社会学会大会、2010 年 11 月 6 日、名古屋大学.

[図書] (計1件)

- ① 渡邊勉編、2011、『2010 年度 ライフヒストリー調査報告書』関西学院大学社会学部渡邊ゼミ、49 頁.

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：30261564

(2)研究分担者

(3)連携研究者